

文芸研究Ⅱ 下原ゼミ通信No. 21

BUNGEIKENKYU Ⅱ SHIMOHARAZEMI TSUSHIN

編集発行人 下原敏彦

2004後期 9/27 10/18 10/25 11/1 11/8 11/15 11/22 11/29 12/6
12/13 12/20

2004年、読書と創作の旅

12・6 下原ゼミ

12月6日(月)の下原ゼミは、ゼミ室3にて下記の要領で行います。

記

□ゼミ雑誌原稿受付：編集委員現状報告

□今日のテーマを討論(新聞記事から)

今日のテーマ「靖国神社首相参拝の是非」

読書の進化「若者はケータイで」

ケータイの進化は驚くばかりだが、「ケータイで読書」までくると戸惑うほかない。最近、ホームのベンチでも電車の中でもじっとケータイを見ている若者が多くなった。ゲームをやっているにしては、指が動いていないし、メールを読むにしても長すぎる。妙だな、と思っていたら、12月1日の朝日新聞にこんな記事があった。

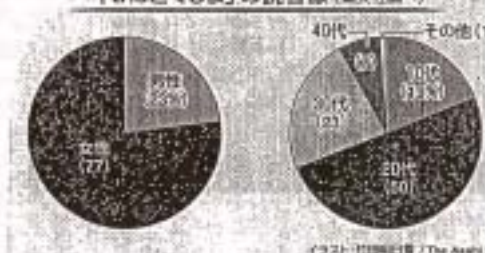
若者は「ケータイ」読書 こんな見出しで最近の若者の読書事情が紹介されていた。以下、新聞から。(2004.12.1「朝日」朝刊24面)

「携帯電話で小説なんて読めないよ」。そんな中高年をあざ笑うかのように、ケータイ読書が浸透しつつある。文芸誌などを読まない若年層が、小説やエッセーを楽しんでいるのだ。出版社は携帯用に編集した「文芸誌」を次々と立ち上げ、「書店」にあたる運営会社も、音楽やゲームなどと並ぶ有力コンテンツになる手ごたえを語りはじめた。(野波健祐)

この術法を可能にしたのは、「通信の高速化」と「ポケット定額制」を各社が採用したことで「本一冊分で数百円かかっていたデータのダウンロード費用が気にならなくなった。」ことにあるという。「小説ファンの層広がる」とある。

以前に、電車内に釣り下がり小説があった。大々的に宣伝していた。あれはいまいずこ…?

「theどくしよ」の読者像(編集部調べ)



■主な携帯電話向け文芸サイト■

「新潮ケータイ文庫」(新潮社)	02年1月	3万5千
「スペースタウンブックス」(シャープ)	03年6月	非公開
「文章読み放題」(角川デジタル)	03年8月	非公開
「どこでも読書」(ミュージック・シーオー・ジュビリー)	04年2月	2万
「theどくしよ」(朝英社)	04年7月	220

(サイト名・運営会社・開始月・有料会員数)

車窓雑言記

この4日(土)神奈川県藤沢市にある母校の学部を見学した。4月のガイダンスで自己紹介したが、私の出身は日大でも農獣医学部(現在は生物資源科学部)である。学科は拓植学科(現在は国際地域開発学科)。昭和40年、1965年に入学した。拓植学科は戦前まで大陸進出の養成学課としてあったが、戦後進駐軍に植民地主義の手先とみられ廃止された。が、60年代アメリカが低開発国援助の目的で平和部隊(海外協力隊)を設立したのをきっかけに、今度は農業技術指導を目的に拓殖を拓植にかえて昭和38年に復活した。私たちは三期生ということになる。当時、農獣医は世田谷区下馬(三軒茶屋近く)にあった。渋谷から玉電で通学できる。ところが、ガイダンスの日、教養課程の一年間は、藤沢市にある六会校舎で行われると知らされた。新宿から小田急線で1時間半はかかるらしい。このときはじめて六会という地名を耳にした。新入生は戸惑った。もともと、この学科志望でなかった新入生が多勢いた。他にこの地では通学時間もかかることから、すぐに何名かが消えたようだ。当時の学生名簿を見てみると172名(定員大幅増)のうち知らない名前が、いく人もある。現在では、都内の大学が郊外や関東近内に移るということは、めずらしくはないが(現に芸術学部も所沢校舎がある)当時は、あまりなかった。しかし、農獣医学部は野菜を作る農場や家畜を飼う場所が必要だ。都内にそんなところがあるのかと、不思議に思っていたので、たいして驚かなかった。現地を下宿するしかないと思った。

はじめて六会に行ったときのことはよくおぼえている。小田急線相模大野駅で、切り離された片瀬江ノ島行きに揺られて小さな駅に降りた。私の故郷は信州の山奥だが、隣町の国鉄の駅のことを思うと、比べものにならないほど貧相な駅だった。木造のバラック。マカロニウエスタンにでてくる田舎の駅。そんな印象をもった。駅前に商店街らしきものが軒を連ねていた。大衆食堂の看板が色あせていた。あとは何もない見渡す限りの原野である。つくづく春でよかったと思った。これが木枯らし吹く晩秋か曇天の冬にでもきたら、眼もあてられなかっただろう。幸いに木々の緑と相模平野の青空が心細さを和ませてくれた。駅の裏手は、深くぼ地になっていて、目指す校舎は対岸の森の向こうにあるらしかった。駅を降りた新入生たちは三々五々くぼ地を迂回して森に向かった。親と一緒にの学生もいた。(後で聞いた話だが、東京の大学に入ったのに、郷里より田舎の町に来たと嘆いた親もいたとか)

1994年頃だったか、千駄ヶ谷の青年会館で全共闘大会なるものがはじめて開かれた。友人の司会で今井澄参議院議員はじめ筑紫哲也、立松和平らが講演するというので出席した。日大と東大が主体ということらしかったが、大半は他大学出身者だった。日大の全共闘員はわずか6名というお寒さだった。壇上で紹介されるのにあまりにさびしいので部外者だが、私も加わって7名となりあいさつした。「あんなに大勢いた日大全共闘学生はどこにいったのか」そんな疑問も「まあ、それが日大かも」に落ち着いた。燃えるのも早い、冷めるのも早かったという意味か。偶然、同じテーブルに拓植学科で英会話を教えていた講師の方がいた。最近、サキの本を翻訳して出版したという。サキは好きな作家だったので話はずんだ。学校の話になったとき彼はしんみり言った。「あのころの日大の学生はかわいそうでしたね」六会の校舎を念頭に置いているとわかった。「ええ、そうかもしれません」私は頷いた。元兵舎だったという木造二階建ての廃屋同然の建物。ひなびた駅を降りて、砂ぼこりと泥んこ道の森をぬけたところから見えてくる六会校舎。英国婦人の若き講師にとってたまらない風景だったろう。「でも」と私は言った。「あの校舎は私にとって楽しいところでした。なにか梁山泊みたいでしたし」「え、そうですか」彼は、怪訝そうに私を見た。そうして浮かぬ顔でつぶやいた。「それならよかったね。ほんとうに・・・」

六会駅は六会日大前と変わっていた。駅からつづく広い通学路。林の中にそびえる超高層の本館。母校は、他のどの学部校舎よりすばらしく生まれ変わっていた。12階にある同期生の研究室から相模平野が一望できた。「ここだったら、もっと勉強していたかも知れない」だれかの言葉に見学者は大笑いした。(編集室)

12・29ゼミ報告

参加者は9名

11月29日のゼミ参加者は、次の皆さんです。(順不動・敬称略)

蛭沢 瑞樹	飯塚みのり	友枝 美緒子
遠藤 匡宣	木佐貫 功	金牧 智広
宮川 雅樹	林 未央	小山田 遊

※ 8名の人が欠席

気がつけば来週は、師走

29日のゼミ参加者は、9名。落ち葉散る季節、なかなか二ケタにはいかないようです。「隣はなにをする人ぞ」ではありませんが、欠席の人たちは、この黄昏、どこでどうしているのやら……。気がつけば来週は、師走。わびしさとせわしさ。そんな感傷が押し寄せたこの日のゼミでした。が、その気分を一気に吹き飛ばすことがあった。

ゼミ誌編集委員で、目下ゼミ誌作成活動に孤軍奮闘してくれている木佐貫君が、なんと一休さんに！びっくりしました。思わず笑ってしまいました。そのせいからよつとさみしかったゼミも、和やかに、にぎやかになりました。

この日のゼミは、はじめにゼミ誌編集委員から提出原稿の校正のお願いとレイアウトについてのお知らせがあった。合評は、まだ2、3作残っていたが、作者が欠席のため断念。かわりに「今日のテーマ」について討論することにした。

——編集委員からのお願いとお知らせ——

- 校正は今週中に。文芸棟1階の下原ゼミラックに投函してください。
- 今日、欠席した人で知っている人がいたら校正原稿をわたしてください。
- レイアウトについて。左上に題名を入れます。まだいくら余裕があるので、自分の背中の写真を本文中に乗せたい人は申し出てください。

はじめての討論会に戸惑いも、しかし熱く

ゼミ誌提出原稿で出席者の合評が終了したことから、29日ゼミは「今日のテーマ」を討論することにした。「今日のテーマ」は、この日までに当日分をふくめ三つのテーマがだされていた。「中学生SEX禁止条例化について」「23歳息子の人生相談」「マンモスはなぜ滅びたか」である。多数決で「マンモスはなぜ滅びたか」が決まった。が、10分の考察時間を過ぎてても考えがまとまらなかった。あまりに空想的でお手上げだった。かわりに二番手の「中学生SEX」を討論することになった。しかし、全員が条例反対者だったため、形式を、「賛成派と反対派」の二つに分けて討論することにした。分けはジャンケンで決めた。

討論会は、下原ゼミでは、はじめてだった。このため発言に戸惑いもみられた。当初、早目に切り上げようという雰囲気も受け取れたが、しだいに熱くなって時間がきた。

福沢論吉は、自伝のなかでどちらの側に立っても論破できると豪語している。

今日のテーマ「中学生SEX規制条例化について」

大人たちの姿勢をみせるためにも必要

遠藤匡宣(35A153-1)

条例規制をしたところで、淫行がなくなるものではない、なんて意見が噴出するのは目に見えていたが、どの意見も大同小異の内容で、的を外している感がある。確かに条例規制で淫行を防止することは難しいが、<規制>が意味するのはそれだけではないはずだ。条例規制することで、大人からの<所信表明>が子供たちに(あるいは世間へと)へと発信されることになる。これには大きな意味があると思う。中学生のセックスを防止することは、石原慎太郎の懸念通り、あくまで<プライベートなこと>であり、そこに首を突っ込むことは実際不可能だし、もし可能だとしても別の問題が新たに糾弾されるだろう。条例はその実質的な機能を果たさなくとも、そこにある、というのが大切で、大人たちの子供たちへの姿勢を表すことで、見て見ぬふりはしていない、ということだけでも、抑止力にこそならないかも知れないが、子供たちの脳の片隅に記憶されているだけで価値があるはずだ。しかも問題が起きたときに、条例さえあれば対応が可能だし、なくてもいいがあるにこしたことはないのではないか?問題は、条例の成果に懐疑的で、かつそれにかわる代案を持たない、弱腰の大人たちの方ではないのか。

11・29の討論会

ジャンケンの結果 中学生SEX規制条例化に

賛成派

蛸沢瑞樹 友枝美緒子
飯塚みのり 木佐貫 功

(遠藤匡宣、時間がなく加われませんでした)

反対派

小山田遊 宮川雅樹
林 未央 金牧智広

進行・金牧智広「なぜ、規制条例に賛成なのか」

【賛成】 知識がないから。責任がとれないから(妊娠した場合)。病気が怖い。(乱れた現状があるのに) なにもしないのはよくない。

進行・金牧智広「なぜ、条例化に反対か」

【反対】 根本的な解決にならないから。(性交渉を)する人はするから。我慢するのはよくない。性教育を徹底することが先。モラルから正しく。

【意見】 中学生は部活で汗を流せ。教育者が言い出したらおしまい。生物学的にみたら早すぎる(将来、体をダメにする)。禁煙は条例化したらなくなった。

提案者(編集室) 個人の自由という見地からすれば規制はまったくのナンセンス。が、この問題が、どうして起こったかを考えたい。(刑事映画で「事件は現場で起きているんだ!」たしかこんなせりふがあった)。性交渉の果て、わずか13、4歳で人生の地獄を見てしまった少女たちを毎日、目の当たりにしている医療関係者にすれば、この現実をなんとかしたい。

もし規制されれば一人でも不幸な少女を救えるかも知れない。そんな切実な思いあつての提訴に違いない。無理からぬことである。おそらく、実際には、日本ではそうした不幸な目にあつた少女は、パーセントにすれば、急増しているとはいへ僅かだろう。1人を救うために99人に窮屈な思いをしてもらう。まさに、この問題は、ドストエーフスキイが小説『罪と罰』で全人類に問うたあの問題、「99人の幸福のために1人を犠牲にしてもかまわない」この問題と同じなのである。人は自由であらねばならない、という理想。しかし、人間は、どんなこともする、どんなことにも慣れてしまう、生き物である。けものであるという現実。そして、悲しいかな管理されなければ生きて行けない生き物でもある。

(これが、戦場でケガをした少女を救うためといえ、そのための条例化といえだれもがこぞって賛成すると思うが・・・SEXの犠牲者だと、なぜ?)

【まとめ】結局は、倫理観の問題。(法的手段をとらなくても、自己規制できるように意識改革する。そんな作品を書く) それこそが、文芸学科にいる自分たちの目標かもしれない・・・。

※かなり優等生っぽい「まとめ」になりましたが、はじめての試みということでよかったのではないかと思います。

「今日のテーマ」討論会に寄せて

編集室

討論する場合、何事も、まずは反対意見を理解してからというのが大切である。たとえば戦争について反対なら、先ず、なぜ賛成かを立証させなければ、反対者は民意を得ることはできない。例えば、いまのイラク戦争がそうだ。これほど反対の声があるのに戦争はつづき、推進者のブッシュ大統領は再選した。なぜか。反対者が、少しも戦争賛成者を理解しないからだ。なぜ戦争をつづけているのか、それを知ろうとしない。(文明の恩恵をこれだけ受けていて、いまさら石油のためとも言えないだろうが…) ただ反対のための反対は、結局どこかの野党と同じで選挙のたびに票数を減らすことで終わる。

そこで今回の討論会だが、当初は反対意見の人は賛成派に。賛成意見の人は反対派の立場で討論してもらおうと思った。が、全員が条例化反対であったため、ジャンケンで分かれて討論することになった。賛成派に回った人は、不利ではあるが、自分のなかに二つの考えをつくることの訓練になったといえる。討論は、自分の意見に終始し、相手の論理を突き崩すまでに至らなかった。が、はじめてということで、今後に期待したい。

さて、今回のテーマについて、討論の最中、何度か提案者である編集室に見解を求められた。「どのように考えるか」と。つまり個人的に、賛成か反対かを問われた。しかし、その都度、曖昧に答えた。意見を表明し説明するには時間がなかったのと、参加者の討論がまだつづいていたからである。気になっていたが、本通信に少しばかり空きができたので見解を述べてみることにした。「中学生のSEX禁止の条例化」。この問題について、私は、若いときだったら、きっと規制条例化には反対だったと思う。が、しかし今この年齢で答えるなら賛成である。新聞のコメントをみると年配者の反対意見がある。女性だから、ちょっと違うのかも知れないが74歳の脚本家まで「若くても個人の自由、ナンセンス」と言っている。若いときならいいが、その歳になっても、こんなことを言っている(おそらく立場上、そう言っているのかもしれない)。もし本音だとしたら人間を知らなすぎる。

総じて新聞記事にあるコメントは賛成も反対も、きれいごと過ぎる。当たり前すぎるのである。賛成の「中絶性病リスク多い」。反対の「年齢にかかわらず個人の自由」どちらでもないの「まず大人が襟を正せ」。討論では「性教育の徹底」「避妊具の使い方」といった

意見もでた。こうしたコメントを見ると、どうも性交渉というものに対し、マスメディアをはじめ識者といわれる人たち、そして、こうした問題を話し合う大方の大人たちは、間違った認識をしている。そう思えて仕方がない。よく「愛していれば」と錦の御旗のように言う。が、実際には「恋人から要求されて仕方なしに」こんな悲しいアンケート結果が多数ある。だいたい「愛していれば」というのも変だ。それは女性の論理だ。たいていの男は、それも若ければ若いほど、本当に愛した女性がいれば、その女性には処女でいてもらいたい。そう願うものである。父親あつての自分ではあるが、無意識下では母の肉体を勝手に扱う男は許すことができないのだ。それに「年齢など関係ない」と簡単に言うが、最初の性交渉は、女にも男にとっても、忘れがたい人生の一大出来事である。それだけに乱れているなら線を引く必要がある。12月2日の新聞一面に「高校生の1割 性感染症」こんな三段見出しをみた。若者が自由を謳歌する役目をおっているなら、大人は常に、規制する役目をおっている。両者は、平行線で決して交わることはない。交わってはいけないのだ。が、近頃は、我慢できない大人が多くなったようだ。

だいたい性交渉についても、安易である。正しい性教育といっても、性行為は人によって違う。一秒で終わってしまう男もいれば何分もという猛者もいる。とても映画やAVビデオのようにはいかないのだ。『復活』のカチューシャは男を「要するに、老人も若者も、中学生も将軍も、教養あるものもないものも、男という男の最大の幸福は魅力的な女性との性行為にある」と考えていたが、若いときの性交渉は男にとって精神的ダメージの方が大きい。それが原因で女性を憎む場合もある。レイプ犯はそうした男が多いと聞く。それに性交渉を個人の自由だからと安易に耽るべきではない。アリストパネスの『女の平和』は女主人公が男と性交渉しないことで戦争を終わらせようとする物語である。現代だって、女性はその気になれば、世界を平和に導くことができるのだ。それほどに女性の性は強いのだ。それだけに若い女性には性を大切にしたい。性行為のないドラマ『冬のソナタ』が女性の心を捉えたのは、そのへんにあったのかもしれない。(編集室)

土壌館創作道場

11月22日「今日のテーマ」

11月22日の「今日のテーマ」は、新聞(読売)の人生相談からでした。大学を中退して水商売をつづけている23歳の息子をどうしたら家に帰郷させることができるか、という相談です。おそらく相談者は、皆さんのご両親とそう変わらない年齢と思います。もしこんな友人がいて、家族から相談されたら、あなたは、どうアドバイスしますか。

私はこう答える

案じ続けるのもひとつの回答

遠藤匡宣(35A153-1)

生活荒れる一人暮らしの息子について息子は二十三才のいっばしの大人なのだから、放っておきなさい、子離れをして、あなたはあなたの人生を歩むことが大切です—まことに正論である。しかし相談者もそんな事は先刻承知の上で、恥を忍んで恥部をさらしているのだ。親の子への愛は理屈じゃない、それならば、いっそのまま息子を案じ続けるのもひとつの回答なのではないか、とぼくは思う。息子の人生を背負う覚悟を持つならば、の話ではあるが、無責任ですいません。

兄をみているよう一度見捨ててみたら

鮎沢瑞樹 (35A095-1)

自分の兄を見ているようで腹が立った。親に心配させておいて、顧みようとしない。なにをしたいのかが、さっぱりわからない。本当に私の兄そっくりだ。傍観者なら「あきらめないうで声をかけてあげて」とか「いつか帰ってきてくれるよ」とか気休めも言えるだろうが当事者になってみると、とてもそんな言葉はかけられない。反応のない息子に、何度も何度も懲りずに話しかけている親をみると冷たい兄に憤るよりも学習能力のない親にあきれてくる。いい加減そんなやつ見限ってしまえと思ってしまう。我ながら冷たいとは思いますが、そうでもしなければなんにも変わらないだろう。向こうは親が構うからつけあがるのであり、こっちがなんにも言わなければ、逆に気にかけてくれるかも知れない。一度見捨ててみるのも手だと思う。

自分で解決するしかない

林 未央 (35A087-2)

「人のせいにするな」これは、私が小さい頃、よく親に言われた言葉である。私たちは、自分の失敗を認めたがらず、責任を周囲になすりつけたがる生き物だ。この言葉は、そんな私たちをいましめるためのものであるが、もう一つの面を持っている。それは「完璧に他人の責任で降りかかる災難というのは、ほぼ100%存在しない、という意味だ。どんな災難も、どんな不幸も、自分で原因を作ったからこそ起きるものなのである。100%自分に責任のない災難なんて、それこそ自然災害くらいのものである。

息子さんのせいで親が苦勞するのも、息子さんがまともな生活を送れないのも、すべてどこかに本人に責任があるからだと思う。結局、自分の問題は、自分で解決するしかない。最後に頼れるのは自分だけ。反対に言えば、絶対に自力で解決できない問題なんてこの世にはなかなかないのだということだ。私のような青二才に相談する前に、そこの所をもう一度考えてみると、私は言うだろう。

11月29日「今日のテーマ」

11月29日の「今日のテーマ」は、26日付の米科学雑誌サイエンスに掲載されたという新聞記事です。2004年(平成16年)11月26日金曜日 読売新聞

「マンモスは絶滅 乱獲じゃなかった!？」

概略: 約6万年前から現在までのバイソンのDNAを分析した結果、約3万7千年前から激滅しはじめたことが判明した。定説のヒトが流入した時期より2万年以上も前。このころから寒冷化が厳しくなったので、激滅の原因は地球寒冷化の影響ではないかと発表した。このことから1万~1万数千年前までに絶滅したマンモスも、環境変化の影響では、と推測されはじめた。それまでは、「マンモスハンター」の異名を持つ現代人(現代型新人)が乱獲したのでは、との説が有力視されていた。空想的過ぎて討論に至りませんでした。架空討論は下記の通りです。

・【乱獲派】やはりマンモスは人間が絶滅させたのだと思います。

【環境派】環境変化についてゆけなかった、と思います。

【乱獲派】それはないでしょう。氷河期は、マンモスに適した環境では。

【環境派】科学的に立証されたんですよ。DNAを調べた結果、ヒトが進出する前から激滅しはじめています。

【乱獲派】それは北米のバイソンであって、アジアのマンモスではない。現在のバイソンだってアメリカ人が絶滅寸前まで追い詰めたんですよ。うちまくって。

- 【環境派】西部劇とごっちゃにしていません。地球規模の話ですよ。でかい話です。
- 【乱獲派】いいでしょう。科学的にね。だったらなぜ、たくさんの死んだ化石が見つからないんですか。環境の変化で一時に死んだのなら、同じ場所にたくさん化石があってもいいはずですよ。絶滅した動物、みんな人間様が滅ぼしたんですよ。トキもニホンオオカミも。マンモスだけ特別ということはありません。
- 【空想派】まあ、環境も人間もいいんですけど、こういうのは、考えられません？そのころは宇宙の大航海時代で、大型哺乳類は食料として放牧されていた。で、森のサルを改良して牧羊犬として、草原に連れてきた。としたらすべてが解決。
- 【環境派】バカバカしい！

普通の一日を記憶する

日記が書店や文具売り場の店頭で並ぶ季節となりました。「私は日記をつけるために生きている」と日記に書いたのは戦中の喜劇役者古川ロッパですが、文芸の基本もまず書くこと日記にあると思います。普通の一日を、どう過ごしたか書き留めてみましょう。

自分の或る1日 遠藤匡宣(35A153-1)

前日の夜から新宿渋谷界隈で遊び呆け、昼頃自室に戻り、泥のように眠る。奇怪な夢(男根の形をしたバビルの塔を登り、雲の切れ間がヴァギナのように見え、それを目指す)で目を覚まし、煙草をくゆらせながら、前日のことを回想するが、相手してくれた女の子の名前が思い浮かばずいつしか退屈して、文庫本に手を伸ばし、腹が空くまでの小一時間読書で退屈しのぎをする。食事をする頃には夕方、テレビを観るともなく観、交際している彼女に電話をして会う約束を取り付ける。前日の罪悪感からいつも以上にやさしくし、生理中だという彼女の身体をいたわり、フレンチキスだけして別れる。時刻は午前0時を過ぎている。

その足(彼女のウチまで車で行っている)でレンタルビデオ店でカーペンター監督の映画を数本借り、朝まで鑑賞し、またねる。学校行かなくちやなあ、と思いながら。

2004年(平成16年)12月5日 日曜日 下(編集室)

5時30分に目が覚める。左のY君は、ぐっすり寝ている。右のI教授は起きていて暗がりでもなやらがさが探し物をしている。窓外を覗くと、物凄い雨と風。湘南の海が、恐ろしいほど荒れていた。もう、寝られそうにないので、一人で洞窟風呂に行く。風呂も雨漏りよほど嵐がすごいらしい。ホールのテレビで、強風のため、東海道線も小田急線も運転見合せと知る。皆「これで安心して休める」と安堵。雨はやんで、晴れてくる。南風である。この季節なのに暑い。朝食前に数人は見晴らし台と弁天神社まいに。何人かは部屋でテレビ。宿に支払うお金の計算。14名で約25万円、足りる。10時、小田急線開通とのニュース。強風だが、橋の上で富士を背景に写真。ロマンスカーはまだ運転中止。藤沢駅付近のコーヒー店に入った後、「四十年六会会」の忘年会解散。11時、藤沢駅。電車来ず、ホームは人でいっぱい。売店横で背広姿の若者が倒れていた。寝ているようでもある。駅員に知らせようかと躊躇していたら中年の女性が、のぞきこんで声をかけた。反応なし、駅員が来て大声で呼ぶと、起き上がった。本当に寝ていたようだ。若者は、近くのベンチで再び寝はじめた。30分待って列車ようやく来る。が、超満員。東京駅から快速。2時前に自宅に。ゼミ学生からメール。添付は忘れたらしい。4時30分道場開ける。受身の会は始める。Y夫妻、H夫妻がくる。Tさんは間に合わなくて欠席。5名全員、柔道着を着る。受身のあと投げ技「体落とし」を指導。皆、熱心に練習。7時20分自宅3ヶ所に電話とFAX。病気だった友人が逝去。7日に葬儀。夏日のような一日。午前1時就寝。

2004年 読書と創作の旅

ある惑星の調査報告書C報告「恋愛について」

報告者 御橋堯言

他人を眺め回し、自分にも照らし合わせて見る限り、恋愛ってのは何かを負うものなのではないかなと思う。

サークルで部長をやるとか、仲間内でリーダー格張るとか、そういうのと同じで、何か(主として責任か)を負うのだ。そのリスクと引き換えに、小さな幸せな世界というリターンを手に入れられる。

だから、恋愛に向いている人は他に何も背負ってない人だろう。既に何らかの責任を背負っている人は恋愛には手を出さない方が良いと思う。二つのものに同時に注意を払ってミスをしなないようにするのはとても難しい。これは一人暮らしの資金を自分で捻出しながら学校行くようにするとか、遊びながら成績も落とさないようにするとかと同じだ。難しい。

恋愛が向かない他のパターンとしては、元々許容量の小さい人というのが挙げられる。例えば問題なく社会的生活を送るのに必要なパワーが100だとしよう。つまり、普通に学校行って、授業出て、バイト行って、休日には友達と遊んで……ということをするのに100のパワーがいるということだ。普通の人はパワーを200とか250とか持っているのだと思う。で、そのパワーのうち、100を基本的な社会生活に使い、残りを趣味(何かをコレクションするとか格闘技をやるとか)に使ったり、恋愛をしたり仕事を引き受けたりに使う。でも、100もしくはその前後程度しかパワーを持ってない人は普通の生活をしているだけでギリギリで、他のことをしている余裕などない。でも、本人はそれに気付かず(もしくは、これがパワー上昇の鍵かと思って)出来もしない仕事を引き受けたり、人を好きになってしまったりする。こうなると大変である。楽しいはず、幸せなはずの恋愛が日常を侵食して、悲惨なことになる。

しかし、もっと悲惨な人達がいる。それはパワー不足の恋愛をしている人の周囲にいる人達である。その人達は一方的な被害者になる。自分も被害者(というのは言い過ぎかもしれないけど)になったことがある。去年、自分の友達のA君がBさんのことを好きになった。A君は普段、妙に自信たっぷりなのだがBさんに関してのみ、臆病・慎重になっていて、見ているもどかしかった。以下、その時期に僕とA君が交わしたメールの内容を一部公開する(要約したものです)。

例1

僕「明日の授業出る？」

A「Bさんが出てるから出る」

例2

A「C(他の男の名前)マジ死ね。俺のBに馴れ馴れしくしやがって」

僕「はぁ(何でそんな事を俺に言ってくるんだ?)」

僕は何度も「だったら早く告白すれば良いじゃん」と言っていたのだが「今は時期じゃない」の一点張りで、A君は不毛なメールを僕に送り続けた。多分合計して200件くらいあったのでは、と思う。

そして、年も押し迫った12月、僕の元に一通のメールが届いた。送り主は何とBさん。

ある惑星の調査報告書C報告「恋愛について」

以下、その内容(2、3通やり取りしたのを要約したものです)。

「A君が私のことを好きだということは知っています。でも、私がA君のことを好きになることは世界最後の日が来てもありえません。これまで正面切って『嫌い』と言えずにいたんですが、このままではダメだと思います。そこで、ちゃんと断りのメールを打とうと思うんですが、どんな内容にしたら一緒に考えてもらえないでしょうか」

僕は了解し、一通のメールを作成した。AさんとBさんが上手く行く未来がないことは誰の目にも明らかだった(念のため、その時Bさんに本当に好きになる余地はないのかという確認は取ったけれど)。そしてそのメールはA君の元に送られ、二人の関係は終了した。

これは、やや特殊なパターンかもしれない。この経験は単純に「妙な体験」として僕にはプラスに作用した。簡単に言えば、面白かった。しかし、やはり最初の愚痴メールは鬱陶しかった(他人の愚痴を聞くのは好きだけれど、限度がある)し、行動に移さない彼は見ていてこっちがジリジリしてしまう。やはり、迷惑な行為だと思う。もう一件、こちらは冗談では済まなそうなので割愛するけれど、すごい人達がいた。喧嘩ばかりしていて、怒りのあまり、僕の制止を振り切って駅のコインロッカーをぶんどり、駅員が駆けつけてきたこともあるし、その人達を止めていたせいでグループの飲み会に出られなかったこともある。

このように、パワー不足の人が恋愛をすると大変なことになる。もちろん、パワーのある人が面倒くさがってちゃんとパワーを振り分けなかったりしてもこのトラブルは起きる。

と言うわけで、結論。「恋愛するなら自分と周りを見てからね」。以上。もちろん、何の強制力もない。僕だってまかり間違えば、ビバ恋愛、ブラボー恋愛、嗚呼あなたが好きです愛してますと云う事になるかもしれないし。

しかし、恋愛、結婚、子孫繁栄…というのは、自分の存在を示したかったり、自分の生きた証を残したかったり、という欲求の究極のようにも見える。恋人というのは自分の一番の理解者だろうし、子供を残すことで人間として存在した証にもなる。「じゃあ、他の形で自分の存在を証明すれば良いじゃん」と思う。そのために僕はせこせこ小説を書いて、自分の意見を発信しようとしているのだ、ということカッコいいなあ。そういうことにしよう。

綺麗にオチがついたところで、糸冬了。

新刊紹介

清水 正著 D文学研究会刊/星雲社発売 定価(本体 2200+税)
実存ホラー漫画家

『日野日出志を読む』

「蔵六の奇病」「赤い花」「水の中」「幻色の孤島」「はつかねずみ」を読む

「蔵六の奇病」の批評を読みながら、私は正直驚愕した。この人は、私が自分の青春の全てをかけて造りあげた作品と、本気で格闘していると感じた。私は今まで、こんなすざまじい評論に出合ったことがない。 作者・日野日出志

くぼた ひさし・文 まいた たみほ・画 宝塚出版 定価 10004円

『かたこと うた』

つぶやきにも似た「ことば」がぼつりとある。ほかはなにもない。一切合財にもない。だが、そのぼつりは真綿に落ちた雨粒。いや、一粒のなみだ。こっそりと心のどこかにしみこんだ。このぼつり、とおい昔をおもいだすなつかしいぼつりだ。 編集室

下原ゼミ掲示板

■この星について報告してください。

或る惑星の調査報告提出者 (12月6日現在)			
御橋克言(A)	友枝美緒子(A)	遠藤匡宣(C)	木佐貫功(E)
御橋克言 (C)			

調査指令は次の通りです。

A報告(惑星のこと) B報告(車中のこと) C報告(恋愛について) D報告(戦争について)
E報告(この惑星の未来について) F報告(ネット集団自殺について)

■下原ゼミ参加者は、日頃どんな本を読んでいるのか、愛読書はどんな本か。提出ください。

アンケート提出者					
蛭沢瑞樹	寺嶋夏生	御橋克言	宮川雅樹	山崎 優	友枝美緒子
遠藤匡宣	林 未央	木佐貫功	飯塚みのり	斉藤 聖	

■書くこと創造することを習慣化するため、自分の考えを記してください。

今日のテーマ提出者					
御橋克言 (2)	友枝美緒子 (2)	小倉響記	宮川雅樹	林 未央	遠藤匡宣

■自分の或る1日を書いてみる。(長短不問) 1日を記憶する。

普通の一日常提出者	
友枝美緒子	遠藤匡宣

ご案内

読書会「ドストエーフスキイ全作品を読む会」主催。『死の家の記録』フリートーク
12月11日(土) 18時～21時 池袋東京芸術劇場小会議室1 (学生500円)

お知らせ

12月13日(月)の下原ゼミは、宮沢賢治研究の第2回目発表会を見学します。

文芸棟・教室1 5時限目

※他の人は、どんなふうに参加しているのか、研究発表を聴くのは、大いに役に立ちます。司会進行・山下聖美 開会の辞 清水正教授 研究発表9名 作品発表1名

12月16日(木) 6時から江古田校舎、校籙剛講師「現代においてチェーホフは有効か」・シンポジウム『グーゼフ』『中二階のある家』について

後期下原ゼミ参加状況 () は定員数

- ・ 9/27 (17) 12名 ・ 10/18 (同) 11名 ・ 10/25 (同) 11名 11/1 (同) 10名
- ・ 11/8 (同) 8名 ・ 11/15 (17) 9名 ・ 11/22 (同) 7名 ・ 11/29 (17) 9名
- ・ 12/6 ()

編集室便り

※創作『1968年アジアの旅 後編』は紙面の都合で休みます。

皆さんの原稿、電子メール/FAXで受付ます。

「下原ゼミ通信」編集室の住所〒274-0825 船橋市前原西6-1-12-816

メール: toshihiko@shimohara.net TEL・FAX: 047-475-1582 携帯 09027646052